

## 図書館資料展示

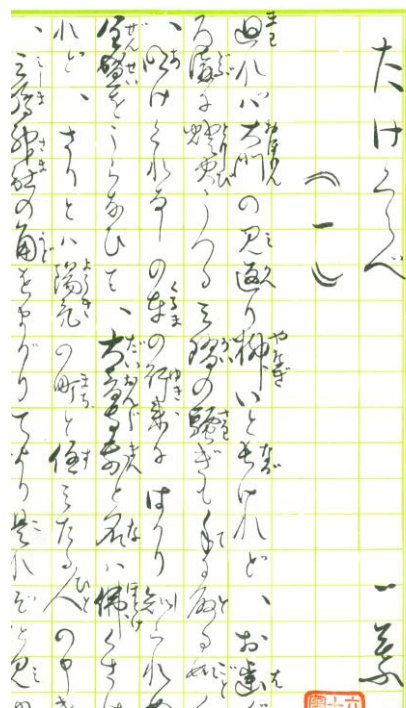
### <『たけくらべ』『詠草』:>

### 樋口一葉生誕 140 年>

樋口一葉は、140 年前の明治 5 年 5 月 2 日、現在の千代田区内幸町付近に生まれ、珠玉の名作を後世に遺し若くしてこの世を去りました。一葉の戸籍名は奈津ですが、なつ、夏、夏子とも自署しました。父は塩山市の農民出身で江戸に出て武士の身分を得、維新後は娘に元武家にふさわしい教養を学ばせようと一葉を中島歌子の名門塾『萩の舎』に通わせました。一葉自筆の『詠草』は十二歳から晩年の二十四歳まで四十数巻が書き続けられた和歌の練習帖です。そのうち 4 冊が立教に所蔵されています。

しかし一葉の短い生涯はほとんど貧苦のなかに行きました。一葉十五歳の時に長兄が結核で死去、父則義は事業に失敗して死去、十七歳の時には一家を支えなければならなくなりました。一葉は小説家として身を立てることを決意して半井桃水に師事し、妹邦子に支えられながら図書館通いなどをして文筆活動を続けました。明治 27 年に『大つごもり』、翌年には『たけくらべ』、『十三夜』などを矢継ぎばやに発表し、森鷗外などから絶賛され、文名も高まりましたが結核に倒れ明治 29 年 11 月 23 日に亡くなりました。享年 24 才でした。

立教大学所蔵の自筆本『詠草』4 冊、吉原近くで荒物・駄菓子屋を営んでいた頃の経験を生かして書いた『たけくらべ』の原稿の複製、掲載雑誌、初版本（複製）などを展示いたします。



### 立教大学図書館

#### <展示資料>

1. 『たけくらべ原稿 樋口一葉真筆』 編集制作 組本社 1982 年 [複製]
2. 『たけくらべ』 樋口一葉著 (『文藝倶楽部』第 2 巻 5 編 明治 29 年 4 月号より)
3. 『たけくらべ』 樋口一葉著 博文館 大正 7 年[初版本] (日本近代文学館 1968 年) [複製]
4. 『詠草』 7、19、40、44 樋口一葉著 (明治 19 年～28 年)
5. 『巨匠の日本画 6： 鍋木清方』 一葉 (昭和 15 年) 復刻版 学習研究社 2006 年
6. 写真口絵「母滝子、妹邦子、一葉」『新潮日本文学アルバム 3： 樋口一葉』 (1985 年) p21.

※展示解説等については、『新潮日本文学アルバム 3： 樋口一葉』前田愛編集 (1985 年) のほか、角川ソフィア文庫『一葉のたけくらべ』武田友宏著(2005)などを参考にさせていただきました。

# 樋口一葉 <sup>えいそう</sup>「詠草」について

文学部日本文学科教授 藤井 淑禎

「詠草」と聞かされても学生諸君はピンとこないかもしれないが、要するに、和歌の草稿を手づから綴じたもののことだ。ただ、一葉の詠草に関しては、すでに旧版の『一葉全集』（筑摩書房、昭28～31）を経て新版の『樋口一葉全集』（同、昭49～平6）でほぼ完璧に紹介し尽くされており、当然、わが立教大学所蔵の詠草四冊もそこに見ることができる（新版全集では第四巻（上）に収録）。その四冊を、全集編者の野口碩氏による注の助けを借りてごく簡単に紹介してみると、こんなふうになる。

- (1) 詠草 7（表書「詠草／樋口なつ子」）一明治一九年八月から二〇年四月までに詠まれた歌の中から一三九首の秀歌を選んだ選歌集。半紙二つ折り縦袋綴じ、本文一六葉（三二頁）。
- (2) 詠草 19（「廿一年四月／恋百首／樋口夏子」）一百首のうち、それ以後に詠まれた十数首が書き加えられている。本文一八葉。
- (3) 詠草 40（「九月より／詠州／樋口夏」）一明治二七年九月から一一月頃までの宿題系（※）の詠草。四七首収録。  
和歌本文一二葉。
- (4) 詠草 44（「三月／詠草／樋口夏子」）一明治二八年三月から五月頃までの宿題系の詠草。三四首収録。本文一〇葉。

これらは昭和三九年度から四〇年度にかけて購入され、平成三年まで文学部日本文学専修に置かれた後、新座保存書庫に移されて今日に至っている。その移転の際、(3)に一枚だけ破取の跡が見られることに井上宗雄先生が気づかれた。しかし、全集の注に記載された(3)の総枚数と本学所蔵のそれとは一致するにもかかわらず、全集には破取跡への言及はなく（破取に気づいていない？）、四七首が記された一二枚の後に筆すさびに使われた二枚が添えられているかのようになっている。本学購入のはるか以前に破取されたと思われる部分はその一二枚目と二枚の間にあるので、この一枚分に記されてあったのが和歌であったのかどうかは、にわかには判じがたい。

破取に注意を促した井上メモの他にも、今回詠草をあらためていて前田愛先生の手になると思われるメモが挟み込まれているのを見つけることができた。(4)の最初のほうに挿入されている「巻三十九」と鉛筆書きされた紙片は、これが旧版全集では「巻三十九」に分類されていたことを前田先生が心覚えのために挟み込んでおいたものにちがいない。

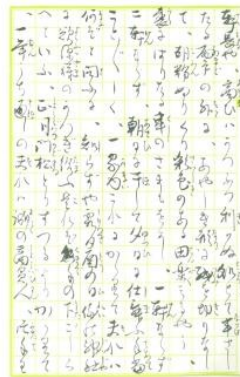
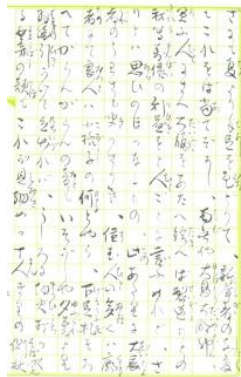
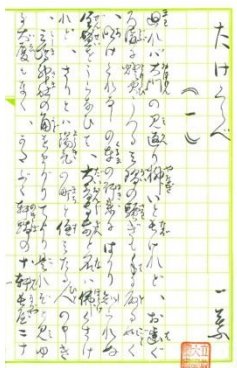
これらの詠草類がそれ自体として貴重なものであることはもちろんだが、このように歴代の先生方の体温や息づかいが感じられるという点においても、これらはまたとないわが立教の貴重な財産というべきものなのである。



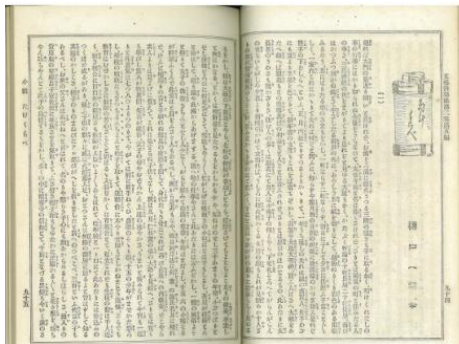
※宿題系・・・一葉が歌塾で課せられた、文字通りの宿題

「カレイ」No.22（立教大学図書館発行  
1998年12月10日発行）より転載

# 展示資料より



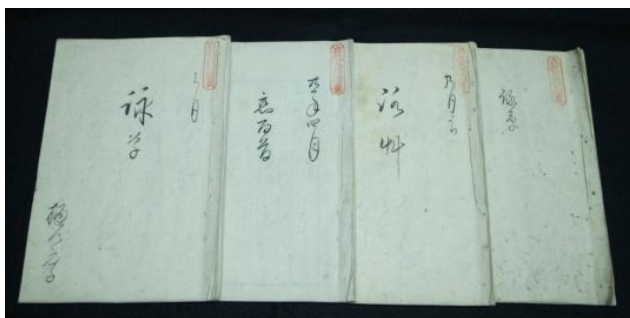
『たけくらべ原稿 樋口一葉 真筆』編集制作 組本社 1982年 [複製]



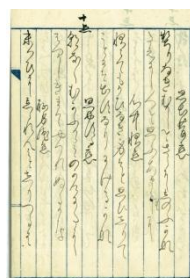
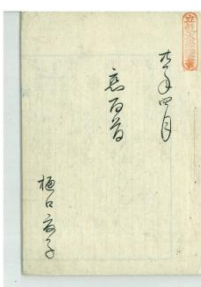
『たけくらべ』樋口一葉著 (『文藝倶楽部』第2巻 5編 明治29年4月号より)



『たけくらべ』樋口一葉著 博文館 大正7年[初版本] (日本近代文学館 1968年) [複製]



『詠草』7、19、40、44 樋口一葉 著 (明治19年~28年)



『詠草』19 戀百首

思出昔戀

契りなきむかしをさらにしのぶ (ぶ) かな  
たえにし人を思ふあまりに

心中恨戀

恨ミてもかひなき身そ (ぞ) と思ひしりて  
こと (言) には出す (ず) なりにけるかな

『巨匠の日本画 6：鏑木清方』一葉（昭和 15 年）復刻版  
学習研究社 2006 年



一葉が秋の舎の歴史で歌のは  
まれをからえた明治二十年は、  
樋口家の繁栄に不吉な降りか  
しはじめたのだ。この年の  
暮には、長男の米太郎が結核  
に罹り、二十二年の夏には、警  
視庁を退職してからはじめた事  
業の失敗で心をいためた前妻が  
五十九歳で崩壊する。一葉は、女  
戸主として収入が絶えた一家  
を支えなければならなくなった。  
母滝子と妹の邦子が藤澤の陶  
工になつていた。西武等の次兄  
虎之助が、一葉だけが家  
の舎に居るとして、任かこんだ  
一時期もいたが、母滝子虎之  
助の別れがわく、母滝子一  
葉は、母滝子虎之助の別れを求  
めて立ち去ることとなる。明  
治二十三年九月のことである。

写真口絵「母滝子、妹邦子、一葉」『新潮日本文学アルバム  
3：樋口一葉』（1985年）p21.

